

◆7 番（内田昇委員） 行政報告書は 35 ページ、シティプロモーション課のところで今日は 6 つ質問をさせていただきます。

その 1 つ目、広報紙等発行事業について、広報かぞの製本数というのが 4 万 1,600 あって、令和 5 年度は 1,966 万 8,558 円と 300 万円ぐらい増えているその理由というのをまず教えてください。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 令和 5 年度における広報紙の印刷製本費の金額が増額になっている理由でございますが、こちらは、広報紙に掲載する原稿は各月によって変動があるんですが、コロナ禍以降にずっと実施していなかったイベント等が再開したことによって、ページ数が増えたことですか、それから、国内の紙の需要の低迷と、それから原材料費の高騰により単価が上がったことが原因と思われます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7 番（内田昇委員） これを多く使うというのはいいことだと思います。その反面、令和 2 年度から 4 年度までというのは、特に 2 年度、3 年度が非常に少ない金額なんです。イベントが少ないとはいっても、これはまさにコロナ禍で、こういうときこそこの情報紙の威力が発揮されると思うんですね。過ぎたことなので、そのときの状況というか、シティプロモーション課では、どういうふうに考えていましたか。コロナ禍における情報紙の発行という面で。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 コロナ禍における情報の発信なんですが、広報紙に掲載するのはもちろんですけども、タイムリーな情報の発信が求められると考えますので、市の公式 L I N E を活用いたしまして、コロナワクチン接種の予約等に活用したり、それからホームページでその都度、市の情報をすぐに発信できるような形で情報の発信に努めておりました。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） コロナ自体の発信はそれでいいと思うのですが、今後、このような大きなパンデミックが起こったときは、その情報を発信するのではなくて、市民が外出とか交流とかが少ないわけなので、違う角度で作成して、逆に額が増えるぐらいのそういう部署だと思いますので、よろしくお願いします。

2つ目に、令和5年度は中学校の生徒が広報記者として加わったと、これの実際の内容とか、工程とか、どんな形で、下にも中学校の名前とか書いてあるんですが、その辺ちょっと詳しく説明してください。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 令和5年度に発行いたしました子ども広報かぞですが、通常の広報かぞの中に4ページの折り込みにいたしまして、令和5年10月と11月に広報紙と一緒に全世帯に配布したものでございます。

参加者ですが、市内の中学校に参加希望者を募りまして、応募いただきました21名の方に子ども広報の記者として、子ども広報の作成に参加していただきました。

テーマを、私たちが選ぶまちの魅力として、大人とは違った中学生の視点で加須市の魅力をどういう形で発信するか等という会議を4回開きまして、自分たちの学校のいいところを紹介したり、市内のお店ですとか公共施設を取材したりして、実際に子ども広報の記者の方に写真の撮影や文章の作成ですとか、広報の吹き出しの文字を書いていただいたり積極的に参加していただきまして、すばらしい子ども広報が完成したものと思っております。

以上です。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 私も、そういう取組というのは、かなり大事で、よかったと考えています。そこに、最近、近年、外国人というのがかなり多くて、ごみとか、いろいろなところでトラブルがクローズアップされるんですね。今度は、外国人記者ということで、そういう試みもユニークで、また一体感も生まれますし、これは一つの提案です。

子どもがそういうことに、市の情報紙に、広報紙に関与するということは、自分たちも市に参加しているという意識がかなり強くなって、将来的に加須を本当に好きになるということのきっかけにもなりますので、これは決してこれで終わらず続けてください。

続きまして、行政報告書の36ページ、市民カメラマン事業、このところで決算額の2万4,400円の内訳というのを、中身を教えてください。消耗品が主

だと思うのですが。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 市民カメラマン事業の決算額の内訳ですが、消耗品費とございますのが、市民カメラマンの方に撮影のとき等に使
っていただく夏場の暑さをしのぐためのメッシュ素材の帽子を作製したものでございます。

以上です。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） あまりにも少ない、ボランティアですから、進んでやっているというのはよく分かるのですが、あらゆるところに市民カメラマン
の方が顔を出しているのをよく見かけるのですね。広報紙に掲載した数ですが、令和元年度は240件と、それがだんだん減って88件、この初年度取り入れ
たときはこれだけ多くて、3分の1ぐらいに減っているというのはどういう原因がありますか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 こちらの令和2年度から4年度までの件数が低い原因ですが、やはりコロナ禍において、イベント等が少なかった
ことが原因と思われます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） ということは、6年度はこの数がもっと増えるだろうと。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 今年度は、市民カメラマンの方の写真の更なる積極的な活用ということに努めておりまして、令和6年4月から9

月までで 149 件広報紙やホームページで活用させていただいておりますので、今後も積極的な活用に努めたいと思っております。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7 番（内田昇委員） この市民カメラマンの方々の目線というのが、市民の目線ですからね、この数が増えるというのはいいことだと思います。職員の方々は、やはり役所にいる時間が多いですからね、市民カメラマンを大いに活用するようにしてください。

また、予算ももう少し最初から多く取って、ボランティアとはいっても、例えば、多少のガソリン代とか、そういうのもイベントでの弁当代とか、そのくらいは普通だと思いますので検討されたほうがいいと思います。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 今後検討させていただきたいと思います。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7 番（内田昇委員） よろしくお願ひいたします。

次の質問、行政報告書 37 ページ。

加須市 P R ・営業推進事業、この営業推進事業とは、まずどういう意識で、どういう必要性があつての事業になっていますか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 加須市 P R ・営業推進事業なんですけど、多くの方に加須市を知っていただきまして、加須市の魅力や各種施策、市内の観光や産業、また、市に住んでいただけるような魅力を発信します。それと、市外の方と併せまして市内の方も、地元の魅力を P R して、地元に対する愛着を醸成するための事業でございます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 加須市の魅力や特徴を市外にアピールすると、主に市外に向けてというのは、このガイドブックとか、スポーツのガイドとか、暮らしの便利手帳は市内だと思うのですが、どういうところを意識して、市外に向けてというのは、具体的にほかに何かありますか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 まず、加須市ということを市外の方に知っていただくことが大切だと思いますので、多くの方が利用される高速道路のサービスエリアにガイドマップ等を配布いたしまして、多くの方に目に留まり、取っていただけるようなPRですとか、あとは、大きな市民平和祭等のイベントがあるときには、事前に報道機関の方に周知を積極的に図りまして、取り上げていただけるような形で市のパブリシティにも努めておるところでございます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 6つ目の名刺の台紙の作成というところで、この名刺自体を私も今ブルーのデザインをした丸のついたのを使っております。できるだけそうやって使って、加須市をPRしようと。この名刺のデザインも非常に研究されていると思うのですが、名刺の形とか、幾つか選べますが、職員の方もその名刺を使っていますか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 職員にも使っていておりまして、3月の人事異動の前等には、全庁に周知をして、活用をしていただくようにPRしているところでございます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 名刺は、初対面の方にまずは自己紹介ですから、名刺のインパクトって結構大きいんですよね。どうでもいいようですけども、かなり大きいので加須市をPRするために、見開きのような営業をかねたような名刺を出す方もいます。そういうのも検討してみてもいいかなと思います。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 名刺のデザインにつきましても、今後も効果的なPRの一つとして検討したいと思います。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） よろしくをお願いします。

続きまして、次、行政報告書38ページ、ホームページ・SNSの活用と含めて関連するので、そのSNSの隣、行政報告書39ページ、ふるさと写真・動画コンクール事業、そういうものを発信したりするということで、このふるさと写真とか、動画コンクールの事業の対象というか、もう少し詳しく目的等の説明をお願いします。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 ふるさと写真・動画コンクール事業ですが、こちらは、毎年、コンクールのテーマを決めまして、市内の方はもちろんですが、市外の方にも募集をいたしまして、テーマに沿った内容で写真や動画を応募いただいているものでございます。

今まで、知らなかった加須市の魅力をこの写真や動画コンクールを実施することによって、あらためて再発見していただいたり、それから、知らなかったものを新たに知っていただけたりというようなことを通しまして、改めて加須市の魅力を皆さんに感じていただくことを目的に実施しているものでございます。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 続きまして、この一番下のところで、加須市ふるさと動画コンクール、昨年、5年度では11点が出品されたと、最初から比べてこれも参加する件数が非常に少ない。その辺についてはどうお考えですか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 委員おっしゃるとおり、令和5年度につきましては、作品の応募点数が少なくなっておりますので、今後、新たに少しでも多くの方に応募いただけるような形で事前の周知に努めていきたいと思っております。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 写真コンクールもそうですけれども、賞品というのがあるわけです。動画コンクールの場合も11点の中から9名がほとんど市長賞、議長賞、入選含めると9名がほとんど該当すると。賞品を差し上げるというのはいいことですけれども、11点ではどうもコンクールにならないので、もう少し、変わった形とかアイデアを振り絞って、最低でも100点ぐらい出るくらいの目標を持って、それでなければ、あまり意味がないんじゃないかと。事業の見直しも含めて、伸ばすのであればもっと伸ばすということで、されたほうがいいと思います。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 動画コンクールの実施につきましては、今年度も予定しておるところでございますので、委員おっしゃったように、事業が有効に実施できるように事前の周知や、また多くの応募につながるような形で実施していきたいと考えます。

以上です。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） このシティプロモーションに絞って、こういう質問をさせていただく理由は、少子高齢化で人口減少が進むと、もう完全にそういう状況の中で、加須市に移住とか、あるいは子どもたちがとどまるとか、そういう魅力づけを今から手を打っていくことが重要だと。それには、シティプロモーション課というのはね、大きなそういう責任を担っている。ただの情報発信ということよりも、そういう移住者に向けてというのを意識するとか、先ほど、子どもたちを参加させてというのもいいことだと思います。そういう意味がある課ですので、頑張ってくださいと思います。

最後の質疑なんですが、次の40ページ、全国こいのぼり写真コンクール事業、これは私も一般質問でも取り上げて、加須市のこいのぼり、ジャンボこいのぼりは大きいと、それを続けているということでは分かるんですが、印刷してできるようなものを加須市の誇りとして果たして通用するのかというのが僕はそういう意識を持っているんですね。

こいのぼりのまちというのをPRするために写真コンクール、写真コンクールの大体被写体というのは、ジャンボこいのぼりが多いんじゃないかと思うんですが、被写体のどんな感じのが、口で言うのは難しいと思うんですけれども、いかがですか。どんな感じの。家庭にたなびいているとか。

○中島正和分科会長 山崎シティプロモーション課長。

◎山崎美幸シティプロモーション課長 この全国こいのぼり写真コンクールに応募していただいた写真ですけれども、委員がおっしゃられたように、ジャンボこいのぼりもちろんなんですが、それ以外に、例えば家庭のこいのぼりですとか、それから、こいのぼりをメインではなくて、こいのぼりをバックにして人物が寄り添っている温かみのある作品ですとか、ジャンボこいのぼり以外にも一般のこいのぼりの写真も多く応募していただきました。

○中島正和分科会長 内田委員。

◆7番（内田昇委員） 分かりました。

私は、こいのぼりのまちということであれば、手描きのこいのぼりを復活させるとか、そういうところに焦点を当てて、ジャンボこいのぼりが象徴されてくると。手描きの方々が、鯉師会という趣味でやっている方々もイベント等を、自分たちでやって、そういう基礎を受け継いでいると、加須の市民ではない方々でも、その辺をきちんとやはり加須市の象徴、顔にしているわけですから、これ言ってもしょうがないのですけれども、私はそう考えているわけです。

質問に戻ります。5月のこどもの日には、ジャンボこいのぼりとかありますが、一般の家庭でどの程度のこいのぼりを飾っているところがあるのかというのはご承知ですか。ちょっとごめんなさい。質問がちょっと違いますか。

今、手描きこいのぼりについて、私はそういう考えを持っているということで質問を終わります。